

おおつかゆきこの*障がい者の働く場レポート

育てるチカラ うまれるチカラ



大塚由紀子
Otsuka Yukiko

vol.2 | 西田装美株式会社

「大切にする」ということは、「ほめて叱って一人前にする」ということ

神奈川県を拠点に展開する総合ビルメンテナンス企業である西田装美株式会社。初めて障がい者を採用したのは、なんと今から33年前。1983年にさかのぼるそうです。今回の取材場所は、JR関内駅からほど近い横浜文化体育館。知的障がい者社員2名を含む4名のチーム編成で、体育館の通路部分やレストハウス（貸し会議室）の床洗浄とワックスがけ作業の真っ最中でした。



取材協力先

西田装美（株） | 神奈川県横浜市

従業員数 約256人（うち障がい者7人）。1968年設立。1983年より障がい者を採用し、スタッフは適性に応じて、設備管理、定期清掃、日常清掃などの業務を担当している。

<http://nishida-soubi.co.jp/>

初めて雇用した

障がい者スタッフが勤続33年に

おおつか：西田装美として初めて雇用した知的障がい者社員が、いまでも就業中だそうですね。

富田社長：もうすぐ勤続33年になります。横須賀市の市役所清掃の仕事を請け負っていた関係からか、市から知的障がい者を雇用してほしいと打診があり、当時の社長で創業者の西田信夫の判断で採用したと聞いています。今ほど就労支援の体制が整っていない時代でしたが、当時の横須賀市は障がい者支援が手厚く、雇用が進めやすかったようです。

おおつか：それ以来、33年も。

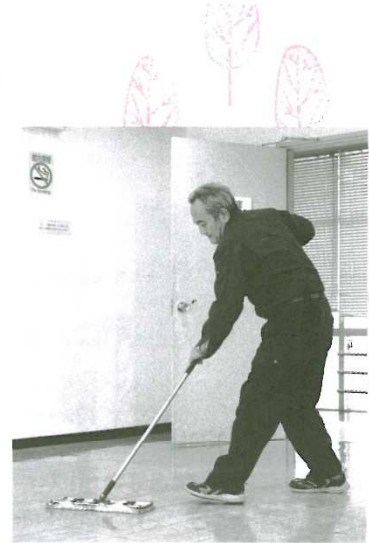
富田社長：大きな病気もなく、元気に働き続けてくれています。もう1人ベテランがいて、養護学校（現特別支援学校）の卒業と同時に入社した知的障がい者社員は勤続20年です。彼らはいずれも定期



代表取締役社長
富田好昭さん



作業中の会話はごくわずか。スタッフ皆さん、阿吽（あうん）の呼吸で連携作業が進んでいきました



勤続33年の笹原さん。オールラウンドプレイヤーと周囲が太鼓判。どんなポジションでもきっちりとした仕事をしてくれるそうです

清掃の仕事に就いてくれています。技術が必要なポリッシャーやワックスがけの作業、窓ガラス清掃なども、難なくこなします。

きちんと指導することによって 一人前の仕事ができるようになる

おおつか: 今回、作業の様子を見せていただき、お二人とも「腕の良い職人」という感じがしました。

富田社長: 手間がかかって面倒な仕事を、じつに忍耐強くやってくれます。たとえば剥離洗浄作業は、養生や資材を揃えることに始まり、汚れを確実に取り、洗剤を残さないようにして、ワックスを幾度も塗り重ねる作業ですが、彼らはとても丁寧に取り組む。たとえゆっくりであっても、仕上がりがきれいなほうが、お客さんの信頼を得られます。

おおつか: 作業の教え方のコツなどはありますか？

富田社長: 「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば人は動かじ」です。何回でも繰り返し教える。少しずつできるようになります。でも、これは障がい者に限ったことではなくて、どんな人でも同じです。

おおつか: それにしても、どうして定着率が高いのでしょうか。

富田社長: 彼らを他の従業員同様、大切にしてきました。だから長く働いてくれているのだと思います。

おおつか: 「大切にしてきた」とは？

富田社長: きちんと指導して、一人前の仕事ができるように育てるということです。一人前の仕事ができるようになればお客様や仲間からも認められる。

おおつか: 本当の意味で「大切にする」とは、甘やかすことではないのですね。

富田社長: 愛情をもって関わりますが、ダメなものはダメ、注意すべきことは遠慮しないでびしっと伝えて、繰り返し教え続ける。いくら障がいがあるからといっても、頼りにされていないことはすぐにわかります。そうなれば技量も下がりますし、いずれ辞めてしまう。

おおつか: びしっと叱るのですか？

富田社長: 叱るというより注意しますが、ときに叱ることも必要だと思っています。とくに健康管理のこととか、口を酸っぱくして言っています。彼らに少しでも長く働いてもらいたいですから。あわせて、他の従業員と同じように、彼たちのことを「いつも気にかけているよ。西田装美の大事な仲間だよ」と常に発信するように心がけています。

おおつか: 当時から障がい者と働くということは当たり前前の社風だったのですか？

富田社長: いいえ。決してそうではありません。正直に申し上げると、彼らと組むことを嫌がったスタッフもいたのは事実です。

おおつか: どうされたのですか？

富田社長: 大丈夫だというスタッフのいる現場を選

育てるチカラ うまれるチカラ



右腰のツールバッグには、七(?)つ道具が。取材時はヘラを取り出して使用

勤続20年の細田さん。「丁寧な仕事」が得意。記憶力がものすごく高く、家具移動がある場合など、印をつけなくても、1つの間違いもなく元の位置に戻せるんだとか



当日責任者の加瀬さん（後列左）、現場責任者の大高さん（後列右）も一緒にパチリ☆

本連載は、(株)FVPホームページ掲載の「おおつかがゆく!」コーナーとの共同企画です。あわせてご覧ください。
http://www.fvp.co.jp/report_case/

んで配置するようになりました。私自身も一緒に仕事をしてきましたが、私は彼らとの仕事はやりやすかったですよ。声がけをきちんとして、心配りをする。視野の中に入れておいて、困ったときにはフォローする。そうすると、きちんと仕事をしてくれますから。

まずは実習で試してみてもいい 1回でわからなければ、何回かやってみる

おおつか: 現在雇用している障がい者の人数は？

富田社長: 7人です。知的障がい者以外にも身体障がい者、精神障がい者も雇用しています。それぞれ

得意なことがありますので、その力を発揮してがんばってくれています。

おおつか: これから障がい者雇用を始めようとするビルメン企業にアドバイスをいただけますか？

富田社長: アドバイスとはおこがましいですが、まずは実習で試してみるといいと思います。いきなり採用して「うまくいかなかったらどうしよう」と思う企業は多いと思いますのでね。1回の実習でわからなければ、何回かやってみるといいと思います。そうやっていくうちに「戦力になりそうだ」という感覚が持てると思いますし、一緒に「やれそうだ」という人材にも巡りあうと思いますよ。

おおつかメモ

業界では、「オーナーの理解が得られないから、障がい者雇用は無理」というバリアを感じる場合があります。今回の西田装美さんでは、日常清掃の場合は事前にオーナーに許可をいただいて研修に入るそうです。その結果はどうか。富田社長に尋ねてみると、断られたことは過去に1回だけとのこと。「会社全体が反対するのではなく、窓口になっている“ご担当者”の意識次第なんです。それどころか最近、『たいしたもんだ』とほめてもらえることが増えましたよ」と話してくださいました。世の中の障がい者に対する意識、昔とはがらっと変わっていますね。

大塚由紀子
Otsuka Yukiko

(株)FVP代表取締役。障がい者の月給1万円に問題提起したヤマト運輸元会長小倉昌男氏と出会い、起業。大企業から中小企業まで幅広く障がい者雇用・就労支援のコンサルティングにあたっている。中小企業診断士。